

土橋 寛教授の近著

『万葉開眼』(上)をめぐって

阪 下 圭 八

本書は、戦後における日本古代歌謡研究の開拓者・第一人者たる土橋寛教授があらたにものされた万葉集原論といふべき本である。NHKブックスという叢書の性格からすると、いわゆる万葉入門的な啓蒙書が予想されがちなのだが、しかし上下二冊五〇〇ページを超える本書のどこにも、読者層への迎合や妥協——手抜きや程度を落とした気配がみじんも感じられなかった。

著者は「まえがき」において本来の意図にふれ、「いったい『うた』とは何か。万葉の『うた』の世界はどうなっているのか。」ということ、さらに「いったい万葉の歌人たちは、飛鳥・藤原朝から奈良朝に至る歴史的・社会的状況のなかで、どのように生きたのか。」という点的をしぼった旨述べているが、本書はそうした根源的な問いの追求として成ったものである。したがって適当な鑑賞や詠嘆でお茶を濁すといった叙述とはそもそも無縁なわけだが、むしろこのような著者の基本姿勢によって、本書は真の啓蒙の名にあたいする質の高い入門書たりえていると思われる。

さて類書にはまず見ることのできない本書の特色のひとつは、やはり民謡ないし歌謡というものを基底に据えての「うた」の世界に対する独自の視角にあるであろう。本書の冒頭には「万葉序説」と題するかなりくわしい(七〇数ペー

ジある) 理論的要約と問題展望にあてられた章がおかれている。そこで「うたの三分野」として、「純粹文芸としての創作歌」「限界文芸としての民謡」「大衆文芸としての芸謡」の区分がたてられるのだが、そうした分析的な視角が万葉集の文学的豊富さ、複雑さを見きわめてゆく上で、有効な指標となるのである。

いわでものことながら万葉集は日本最初の抒情詩集であり、それは口誦文芸としての共同体の諸歌謡の蓄積の上に個の感情の個性的表現として開花したものであった。万葉歌のひとつひとつは衆の歌謡から個人の抒情詩への進化、展開の過程のどこかにか位置を占めるわけで、そこから古今集以降の「和歌」の集にはない万葉集総体の魅力と多様さがもたらされているはずである。問題はそうした万葉の世界にどのようにして近づいてゆくのだが、堂上歌人の文学としての勅撰和歌の観念では齒が立たないのもちろん、万葉歌を近代社会に再生せしめたアララギ派歌人の短歌実作者としての見方も、万葉集の文学的実体よりすれば、はるかに狭隘なものでしかなかった。その一端は、アララギ派の批評の一典型といえる斉藤茂吉『万葉秀歌』では長歌がすべてカットされているところにもうかがえるであろう。

現在、万葉歌の創造的生命にふれてゆくためには、アララギの抒情詩観がのりこえられねばならぬ。この自覚の方法が著者のたてた「うたの三分野」に他ならず、そこから従来は目にうつらなかつた万葉集のあらたな側面に光があてられるのである。

個々の歌の位置づけや評価にかんし、著者の発明に属する見解は本書の到るところに見られるはずだが、たとえば額田王の春秋の優劣を判定した歌(巻一・一六)についての論など、著者ならではの鋭い着眼が示された個所といえよう。つまり春秋の長所・短所をあげつらいながら展開するこの長歌は、とどめの一句「秋山われは」にいたって、人々の意表を衝いた判断がなされるのだが、まさにその意想外の落ちのつけ方から、著者はこの雅宴の開かれた当座の季節を秋と推定する。いま秋だからこそ、この強引きまわる決着が一座の人々にうけ入れられたのだという。これは、俗にコロ

ンブスの卵などといわれる、盲点をついた新見というべきだが、しかしこうした新見がもちろん思いつきに出されるのでなく、このばあい、民謡の「即境性」という土台をふまえての立言だけにずしりとした説得力をとまなう。さらにいえば、右の作の機知的なはぐらかしの技巧がやはり民謡の発想にもとづくとの指摘は、額田王の歌よみとしての位置をはかる上で重要であろう。額田王という、とかくその才気に注意がむけられやすいのだが、紛う方なき才気喚発の右の作にしてやはり「うた」の伝統的発想をしたたかにふまえているという事実を改めて気づかせてくれるのである。

著者の文学論・歌謡研究のひとつの源泉が柳田国男の民謡論を中心とする民俗学にあることは大方の認めるところであろう。「うた」の機能や生熊、「うた」の行われる場への照明等々が民俗学的知見を有力な武器として試みられており、その学問的集大成は著者の『古代歌謡と儀礼の研究』(昭40)や『古代歌謡全注釈古事記篇』(昭47)『同日本書紀篇』(昭51)等に結実している。同様なアプローチが本書においても随所にみられ、右はほんの一例に過ぎないのだが、そうしたいわば民俗学的方法の摂取とならんで本書を特色づけているのは、戦後の日本古代史学の到達を十二分にふまえての当代社会の歴史的動向、とりわけ政治的人間関係についての洞察の周到さであろう。

たとえば本書第四章「柿本人麻呂」にはこの書の中で最も多くのスペースが割かれているが、そのはじめに「持統女帝と藤原不比等」と題する節があり、人麻呂が歌人として奉仕した宮廷のいわば権力構造が述べられている。持統天皇と不比等との政治的提携はこの時期を論ずる史家なら必ずふれるところだろうが、しかし著者はさらに深く立入り、「東大寺献物帳」にみえる草壁皇太子の佩刀の伝承記事、藤原宮の名の由来等によって、女帝と不比等との軽皇子即位実現のための盟約を想定する。そしてそのような盟約を背景にしてつぎの持統御製をよむべきだとするのである。

飛鳥の明日香の里を置きて往なば君があたりは見えずかもあらむ(巻一・七八)

この歌は題詞ではまず奈良遷都の際に元明天皇がよんだものとし、なお一書の伝えとして持統天皇作ともしるされて

いる。つまり作者についての異伝が生じているのだが、著者の炯眼はこの些細で偶然的とみなされやすい異伝をとらえ、その必然性を解きあかしてゆくのである。

……この歌を、和銅三年藤原京から平城京への遷都の時の元明天皇の御製とする題詞の説は全くの誤りかというところではない。時に当たって自分の心情を表わすのに古歌を借りて誦詠する習わしがあったこと、またそのために作者の異伝が生ずることは、「万葉序説」で述べたとおりである。これは持統天皇の御製を、平城遷都の時に元明天皇が自らの心情を表わす歌として誦詠したものであらうと思う。したがって問題はむしろ藤原遷都の時の持統天皇の作歌が、どうして平城遷都の時の元明天皇の心情を代弁しうるのか、という点にある。

藤原遷都から平城遷都まで十六年の歳月が流れているが、その間、持統天皇は大宝二年（七〇二）に崩じ、文武天皇も慶雲四年（七〇七）に崩じた。当時文武天皇の皇子首皇子（後の聖武天皇）はまだ七歳で、この皇子の即位を実現するために、再び草壁皇太子の妃であった元明天皇が即位したのである。それから三年後に平城遷都が行われたのであって、この時の元明天皇は、孫にあたる首皇子を即位させるための中継ぎの女帝として、藤原京遷都の時の持統天皇と全く同じ状況、同じ心境にあったのであり、目的実現のために頼るべき人物が藤原不比等であることも、何ら変わりがない。不比等はかつて草壁皇太子から預かったその佩刀を、文武天皇即位の時に献じたが、その崩御によって再び預かっているのである。元明天皇は、持統天皇の藤原遷都の時の飛鳥望郷の歌をそのまま誦詠することによって、持統天皇と不比等との協力体制をそのまま継承する意志を表明したのであり、「飛鳥の明日香の里」の句をそのまま誦詠することは、地理的な適切さにもかかわらず、心情的には単なる適切さ以上の積極的な意味があったのである。（上）一三四～五ページより）

あえて長文を引用したのは、史料に対する著者のよみの深さと推論展開のきめこまかさとをうかがいたかったからで、

右のばあい、著者はまたすぐれた古代史家として史料と想像力とを駆使し、ある作品の生まれでる具体的な生きた状況を再現しているといえるであろう。そうした史眼によってとらえだされた新見・創見のたぐいは、本書中枚挙にいとまないほどにあげられるが、なお一例を紹介しておきたい。

もののふの八十字治川の網代木にいさよふ浪の行くへ知らずも(巻三・二六四)

これは数多い人麻呂作の中でも人によく知られた歌だろうが、従来は仏教的な世間無常の観念をよんだものとする見方が多かった。しかし著者の批評はつぎのようである。

「もののふの八十字治川」の川浪が象徴する無常の相は、生老病死などの個人的な無常ではなく、多くの「もののふ」たちの無常——具体的には壬申の乱がもたらした近江朝のもののふたちの流離の相を意味するものであろう。瀬田の敗戦後、近江軍は総崩れとなって大友皇子は自殺し、右大臣中臣金は斬首、右大臣蘇我赤兄、大納言巨勢比等、およびそれらの子孫、中臣金の子、犬上川の戦いで内紛から山部王を殺して自殺した蘇我果安の子らは皆流罪に処された。たとえ死罪・流罪を免れても、その一族の流離は目に見えている。人麻呂が天津の宮址に立って見たのは、必ずしも宮殿の幻影ばかりではなかった。それがいま宇治川の川浪の「行くへ知らぬ」相とダブっているのである。

「もののふの八十字治川」とか「もののふの宇治川」「もののふの八十の心を」などの修辞はほかにもあるが、一首全体の意味にはかわりのない機械的な用法で(たぶん人麻呂の歌の模倣であろう)、人麻呂の歌をそれらと同一視することはできない。「もののふの八十字治川」という句があらわすものものしいイメージが、網代木に「いさよふ浪」の無力感に収斂されてゆく悲哀感は、近江荒都の反歌に通じるものがある。(上)二五八〜九ページより)

「うた」とはいったい何であるかをいま改めて問い直すという姿勢に立ちつつ、万葉の歌々の表現の様相にかれら万葉びとの生の軌跡を、さらには時代の母斑をよみとってゆくこうとするのが本書に一貫する発想といえよう。以上はそこ

からもたらされた成果のほんの一部をのぞきみにすぎない。書評というより無雑な紹介に終わってしまったが、本書をひもとくことによって今またあらたに学びえた万葉への「開眼」の一・二をしるさせていただいた次第である。なお本書は昭和五十三年度毎日出版文化賞を受賞されたことを附記しておく。

(日本放送出版協会刊、(上)各六五〇円
(下)各六五〇円)